

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年 4 月 25 日

派遣者氏名（専門分野）	山崎恭宏（フランス文学）
-------------	--------------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	「バルザックにおけるオペラと劇場の表象と役割」研究
-------	---------------------------

派遣期間

2011 年 1 月 30 日 ～ 2011 年 4 月 4 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	パリ	パリ第7大学	José-Luis-Diaz 教授

派遣先で実施した研究内容

最重要研究対象としたのは、『Revue musicale（1827—1835）』、そして『Revue et gazette musicale de Paris（1835—1880）』の音楽雑誌である。音楽研究には重要な文献であるが、日本ではこの2つの雑誌を所蔵している機関がなく、またフランスの国立図書館の閲覧サイト「ガリカ」でさえも閲覧することができない。バルザックが音楽を題材とした小説を書き終えた38年までのこの両雑誌におけるオペラ関係の記事を渉猟した。加えてオペラ劇場の外観などの当時の記事も閲覧した。

今行っている研究のもとになる「声」と「歌」というテーマについて当時の文献のリサーチをおこなった。辞書、「声」についての論文、民謡集などを幅広く触れることができた。また、バルザックの作品に引用されている民謡からオペラの歌詞を当時のテキストで閲覧した。

上記の2つの音楽雑誌は主にフランス国立図書館の別館にある音楽図書館で閲覧した。オペラ、オペラ・コミック、ヴォードヴィルなどの当時のテキストの閲覧、収集はミッテラン館、リシュリュー館の芸術・スペクタクル部門でおこなった。辞書、基本的な文献については、ミッテラン館とオペラ座図書館でリサーチした。最近の研究論文の閲覧、コピーはサント・ジュヌヴィエーヴの図書館を、そしてオペラ、劇場性についての博士論文の閲覧はセルパント通りにあるパリ第4大学の別館図書館を利用した。

リサーチとは別に、パリ第7大学の授業に数回聴講した。さらに指導教官であったディアズ先生がパリ第7大学で定期的に開催しているバルザックのセミナーにも参加した。最近の研究について、そして私の研究にたいして相談する機会を得た。セミナーのテーマはバルザックにおける辞書を出版するにあたっての現状報告であった。また、2つの博士論文の審査に出席し、発表、受け答えの形式など今後論文を提出するにあたって大変勉強になった。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

『Revue musicale』、そして『Revue et gazette musicale de Paris』の音楽雑誌の閲覧および重要箇所のコピーをすることができた。まだすべてを読んでいないが当初の研究計画通りに進んだ。これらの（後者にバルザック自身も参加した）雑誌はロマン主義時代に音楽理論の権威であって、バルザックはその影響を受けたに違いない。当時の一般的な音楽観、音楽の流行などを垣間見せてくれる資料であり、バルザックの音楽小説の構造やテーマを考える上で重要なものである。作者がどのようにそれらを小説の中に組み入れ発展させていったかを解明できるだろう。また、音楽理論など以外に、劇場の外観、内部の内装、観客層、雰囲気など当時の貴重な証言もえることができた。内部の装飾や色、劇場の設計図まで調査することができ、それらは必ずしも小説内での描写と合致するものでなく、そこに小説の展開に応じた作者独特の劇場のイメージ、仕掛けなどが看取される。この二つの雑誌以外にも音楽批評、劇評をのせた新聞がいくつもあるが、それに関してはリストをのみ作成した。

ロマン主義時代における他の作家の音楽小説を比較検討する当初の研究計画は大きく変更した。同時代作家の音楽小説、オペラ劇場が主要な舞台になった作品を分析することは、バルザックの音楽小説との関係性を詳らかにし、文学におけるオペラ劇場の役割という主要なテーマについて明らかにするつもりだった。しかし、日本のバルザック研究者から、おもしろいテーマだが、莫大な時間がかかり、そして欠落する箇所があれば研究として意味がないので、あまり他の作家について分析するよりもバルザックの作品のなかで考察したほうが良いと助言をえた。したがって、他の作家との比較が不可欠である、音楽における「詩」と「科学」のテーマなどは今後の研究課題にする。

バルザックにおけるオペラを考える上で基本となる「声」と「歌」についての研究をおこなった。これらについて記述された当時の辞書や、声についての当時流行した生理学的なもの、骨相学のように声によって人物を定義している文献などを閲覧した。もちろん、作者は少なからずこれらの言説に影響を受けたはずだ。作品において登場人物に意図的な声があたえられ、性格づけられ、さらにそれらの声で歌が効果的に歌われる。「歌」は作品にしたがって民謡であったりオペラの歌詞であったりするが、バルザックは「声」や「歌」にどのような意味をもたせたのか。もちろん場所との関係も避けることはできない。作品分析をするために、これらの情報は大変有意義であり、派遣での思いがけない研究成果になった。

バルザックの『ゴリオ爺さん』における研究では大きな成果が得られた。登場人物が歌うオペラ・コミックまたはヴォードヴィルの歌詞が作品の展開のなかで重要な役割を演じている。それらのほとんどは今では舞台にあがらないが、しかし当時出版されたテキストは残っているので、それらをコピーまたはデジタルカメラでおさめた。バルザックのテキストに引用されている歌詞だけで解釈するのではなく、引用されていないそのあとに続く部分が注目に値した。ヴォートルンの歌うこれらいくつかの歌詞は、意味において有機的につながりながら、ラスチニャックとの二人の間では暗号のような役割を果たす。歌をとおして、貴族階級とブルジョワ階級に属するヴォケー館とのコントラストが描かれ、さらにその住人たちの社会的、趣味的な差異もくっきりとあらわれる。

残念だったのは、この作品の中で引用されている1節の歌詞だけがその出典を特定することができず、私の考えではそれも歌劇からの引用ではないかと思っていたので、当時上演されたオペラ・コミック、ヴォードヴィルのリストの中から時間を決めてリサーチしたが見つからなかった。結果としてはこのリサーチは無駄になったものの、いままで触れることがなかったオペラ・コミックやヴォードヴィルのテキスト、そしてそれらの研究から、『ゴリオ爺さん』においてオペラと比較して格下と思われるこれらが重要な意味をもっていると確信した。5月末に学会で発表する予定である。

派遣後の研究発表の予定

『ゴリオ爺さん』における「歌劇」の表象と役割について（日本フランス語フランス文学会春季大会、於 一橋大学、2011年5月28日）

日本フランス語フランス文学会関西支部大会（発表予定）